

サイ・テラ こころ・知と技の発信

[25]

埼玉大学・理工学研究の現場

■公害は終わった？

長年、気象と環境の関わりをテーマとしてきた。

1980年代には「公害の時代は終わった」などの見解も飛び交い、汚染物質を排出せずにうまく管理して、「環境の時代」を迎えることができるのかと思っただが、良い環境の時代はやすやすとは来ない。次々と深刻な問題が露見する。ついには放射

性物質が漏れる事態まで起きてしまった。

今日では排出基準・環境基準の類によって汚染物質の排出が規制され、一定の限度以下にコントロールされている。しかし、事故時の排出はそのコントロールが利かないのだから始末が悪く、影響範囲の予測も難しい。

■光化学スモッグ全国一

近年の日常生活において、排出を減らして環境が改善されたとは、はっきりの感じられるのは、車や煙突から出る粒子である。特に、寒い季節に視界がかすむスモッグは目に見えて減った。

環境のための辛抱は可能か

吉門 洋 埼玉大学大学院 教授

一方、原因物質の排出が減ったのに改善が見られないのが夏の光化学スモッグだ。埼玉県はその発生頻度において全国随一である。発生が減らない原因が取り沙汰されるが決め手がなく、解決方策が定まらない。近年、大陸で発生した高濃度気塊が風に運ばれて来る現象が知られているが、これは関東では主要な要因ではない。

■根っこは一つ
光化学スモッグが減らないといつても、注意報レベルの高濃度の発生は完全に気象条件に支配されていて、曇天や雨天では問題にならない。晴れても、暑さが毎日同じではないのと同様、日によって濃度レベルは異なる。風の向きや強さにも影響され、高濃度の出現場所や時間帯は変化する。

そもそも風が強くと吹き抜ける条件では高濃度汚染は発生しにくい。埼玉県が不利な点は、関東平野の中央に位置するため、とかく空気がよどみがちであることで、夏の曇りも根っこは一つである。

■気候温暖化に注目

今世紀に入ってから注目しているのは、気候温暖化の影響である。昨年の夏の猛暑は記憶に新しい。単に気温が高めに増加するだけでなく、晴天日が増加してきてはいないか。

また、都市域では周辺域よりも常に気温が高めになるヒートアイランドと呼ばれる現象も、気候温暖化と相補的に作用し、関東平野内の風の吹き方をも変化させていると考えられる。それらの変化が光化学スモッグの高濃度の発生頻度とどのように関係づけられるかを解析中であり、地域気象学。

■良い環境への道のり

気持ち良く暮らせるのが良い環境と思っていたのに、良い環境のために辛抱一筋の生活とは矛盾もはなはだしいが、今年は今春先から辛抱が可能なることを知らされた。前途は長くなりそうである。

青門 洋氏(よしかと・ひろし) 47年生まれ。京都大学理学部卒。同大学院博士課程中退。工業技術院、産業技術総合研究所を経て08年より現職。博士(理学)。専門は大気環境科学、特に地域気象学。

埼玉経済



企業、団体商店街などの話題や情報をお寄せ下さい
TEL 048・7995・9161 FAX 048・653・9040